様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７２００８１

研究課題名（和文）映画史および映像理論における「不動性」の系譜をめぐる研究

研究課題名（英文）A Study on the "Motionless" in Film Theory and History

研究代表者
堀　潤之（HORI, Junji）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：８０３８８４１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ニューメディア以降の映像環境において諸メディアの収斂という事態が生じつつあるという現状を批判的に吟味するべく、デジタル・テクノロジーの登場以前にまでさかのぼって、(A)不動性をめぐる映像理論小史、(B)不動性の映画史、(C)現代美術の映像作品における運動と不動という3つのトピックを通じて、主として20世紀後半の映像理論および映画史・映像芸術史における「運動への抵抗」の系譜をたどったものである。

研究成果の概要（英文）：Contemporary media ecology is characterized by media convergence. Keeping this in mind, this study goes back to the pre-digital era and examines the topics of the "motionless" in the film theory and history in the second half of the twentieth century through three intersecting research themes : (a) a short history of the "motionless" in film theory, (b) case studies of the "motionless" in film history, and (c) the relationship between the motion and the motionless in contemporary art.

研究分野：映画研究・表象文化論

キーワード：映画理論　ゴダール　ニューメディア　アンドレ・バザン

１．研究開始当初の背景

映画という芸術は、言うまでもなく、映像の「運動」をその本質的な構成要素とする芸術である。いかなる映画作品であれ、それが上映される限りにおいて、時間的な持続のなかで展開していくことを避けられない。その意味で、仮に被写体が動いていなくても、いや、映像そのものが静止していたとしても、映画の映像は運動状態から逃れることはできない。にもかかわらず（あるいは、だからこそ）、映画を中心とする映像についての理論的探究の場、および実際の映画・映像作品の歴史において、「運動」という映画の根本的な成立条件にあらがおうとする試みがたびたび企てられてきた。本研究が注目するのは、そのような映像理論および映画史・映像芸術史における「運動への抵抗」という契機である。

「運動」と不可避的に結びついているかにみえる映画芸術のただ中で「不動性」への志向がしばしば蠢いていた一方で、テクノロジーの発展によって、映画を見るという体験は必ずしも不可逆的な時間の流れに規定された体験ではなくなってきた。1970 年代末以降の家庭用 VHS の普及、および 1990 年代半ば以降の DVD の爆発的な普及は、動く映像の不動化という行為をごくありきたりのものにした。とくに、映像制作と受容の両面における 1990 年代以降のデジタル・テクノロジーおよびニューメディアの発展は、より一般的に言って、動く映像と不動の映像という二つの体制の収斂、さらには旧来の諸々のメディアのコンピュータ上での収斂という事態をもたらした。その結果、とりわけ現代美術のフィールドでは、動画像と静止画像の境界がかつてなく曖昧になっていると言える。

こうした状況を背景に、近年、欧米圏の映画・メディア研究では、諸メディアのハイブリッド化という現象が、デジタル・テクノロジーの普及以前にまでさかのぼって注目されるようになってきた。なかでも、映画と写真がどのように異種交配してきたかというテーマは、この二つのメディアが現実の写真的複製という同一の原理に基づいているだけにいっそう、諸メディアの収斂の先駆的な現象としてとくに注目を浴びている。それと並んで、映画と現代美術との遭遇――とりわけ、ヴィデオ・アート以降の美術作家の手による映像作品との遭遇――についても、近年、多くの研究がなされつつある。

ニューメディア以降の映像環境を思考するにあたっては、もはや映画だけを取り上げることには限界がある。本研究は、上述の研究動向を踏まえつつ、映像理論・映像芸術史における「運動への抵抗」の系譜を打ち立てることを通じて、写真・映画・現代美術を横断するオルタナティヴな映画史――より適切には、映像芸術史――を素描することを目指して構想されたものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、ニューメディア以降の映像環境において諸メディアの収斂という事態が生じつつあるという現状に対する批判的な視座を確保するために、デジタル・テクノロジーの普及以前にまでさかのぼって、主として 20 世紀後半の映像理論および映画史・映像芸術史における「運動への抵抗」の系譜を、(1)不動性をめぐる映像理論小史、(2)不動性の映画史、(3)現代美術の映像作品における運動と不動という 3 つのトピックを通じて、写真・映画・現代美術を横断しながらたどることにある。以下、各トピックについて研究の目的を記す。

(1)不動性をめぐる映像理論小史

このトピックに関しては、1920 年代の前衛映画理論から現代に至るまでの映画・映像をめぐる理論的言説のうち、「不動性」や「写真」といった要素に目を向けた主な例を取り上げる。特に焦点を当てるのが、不動のフォトグラムにこそ高い価値を付与したロラン・バルトの論文「第三の意味」（1970 年）以降の、フランスを中心とする理論的言説の展開である。それらの言説が、テクノロジーの発展や、映画記号学をはじめとする諸々の理論的潮流や、具体的な映画作品のあり方とどのように絡み合ってきたのかに留意しながら、不動性をめぐる学説史を整理する。

(2)不動性の映画史

このトピックに関しては、さまざまな映画作品に登場する「不動性」と「写真」のモチーフに注目しながら、映画史が具体的にどのように「運動」にあらがってきたのかを、主に第二次世界大戦後の欧米の映画、特にフランスのヌーヴェル・ヴァーグとその周辺の映像作家の事例に焦点を当てて見ていく。

(3)現代美術の映像作品における運動と不動

このトピックでは、考察の対象を映画作家だけでなく、ヴィデオ・アート以降の映像系の美術作家に拡大し、動画像と静止画像を自在に行き交うような実践の系譜をたどる。1990 年のポンピドゥー・センターでの展覧会《イメージの通過》（Passages de l’image）以来、そのような実践は欧米の多くの展覧会で関心を集めてきた。ここでは、映画作家たちによる美術館への進出の試みを跡づけると同時に、特に映画的な想像力のあり方にこだわっている美術作家たちの作品が現出させるイメージの新たな境位の理論的な含意を解明する。現代美術シーンが「映画的な効果」（フィリップ・デュボワ）をどのように取り入れているかを調査することで、現在における諸メディアのハイブリッド化の状況を冷静に観察することを目指す。

３．研究の方法

本研究課題の研究方法は、上述の 3 つのトピックのそれぞれに関して、(1)文献の収集および精読、(2)研究対象作品の収集および、(1)の知見を活かしつつ為されるそれらの詳細な分析、(3)欧米の美術館や各地の芸術祭における現地調査を踏まえた作品分析、というやり方をとる。

(1)不動性をめぐる映像理論小史
アンドレ・バザンからレーモン・ベルールに至るフランスの映像理論関連図書を収集するとともに、レフ・マノヴィッチを中心とする英語圏におけるニューメディア研究の動向にも気を配った。

(2)不動性の映画史
ジャン＝リュック・ゴダールとクリス・マルケルを中心に据えつつ、フランソワ・トリュフォー、ハルーン・ファロッキ、マルセル・オフュルスの作品分析にも力を入れた。

(3)現代美術の映像作品における運動と不動
2014 年度にパリおよびヘルシンキで調査を行い、多くの展覧会を訪れた。また、2013 年度および 2015 年度には山形国際ドキュメンタリー映画祭を訪れ、他の手段ではなかなかアクセスできない作品群を視聴した。

４．研究成果

本研究課題の研究成果は、(1)不動性をめぐる映像理論小史、および現代美術の映像作品における運動と不動に関するものと、(2)不動性の映画史に関するものに大別できるため、以下、それぞれについて今後の展望も交えつつ記述する。

(1)不動性をめぐる映像理論小史、および現代美術の映像作品における運動と不動

これらのトピックに関する研究成果は、以下の 3 点に整理できる。

① 2014 年度のパリおよびヘルシンキでの調査も踏まえて、フランスの映画／映像理論家のレーモン・ベルールの映像インスタレーション論や映像論についての読解を進め、フランスの映像理論の言説におけるベルールの思考の位置づけに関して、論考・発表・翻訳などの成果を発表した。また、『表象 08』誌での共同討議「ポストメディウム理論と映像の現在」にも加わった（共同討議「ポストメディウム理論と映像の現在」(加治屋健司／北野圭介／堀潤之／前川修／門林岳史)、『表象 08』、2014 年、18-45 頁)。
② 英語圏における 1990 年代以降のニューメディア研究の動向をサーヴェイし、レフ・マノヴィッチ『ニューメディアの言語』の邦訳を詳しい解題とともに上梓した。この研究はニューメディア研究の起爆剤となった基本文献であり、国内のメディア研究を活性化することに今後も寄与することが期待される。
③ 戦後フランスの映像理論の基礎にあるアンドレ・バザンの仕事に注目し、彼の最初の単行本である 1950 年刊行のオーソン・ウェルズ論の邦訳を含む『オーソン・ウェルズ』を上梓するとともに、バザンの「写真映像の存在論」に流れ込んでいる知的系譜をマルローとサルトルに即して分析した。ここで着手した研究は、バザンを中心とするフランス映画批評の総合的研究へと発展しつつある。

(2)不動性の映画史

このトピックに関する研究成果は、以下の 3 点に纏められる。

① ゴダールに関する研究成果として、ゴダールの日本における受容についての論文、ジガ・ヴェルトフ集団期の総説、『右側に気をつけろ』『ヒア＆ゼア』『パート２』『うまくいってる？』『ゴダール・ソシアリスム』『さらば、愛の言葉よ』といった個別の映画に関する作品論などを発表した。今後の展望として、こうした作品論も含めて、これまでのゴダール研究をよりまとまった形で公刊することを予定している。
② 20 世紀後半において、ゴダールと並ぶ最重要のフランスの映像作家クリス・マルケルに焦点を当て、彼の東アジアへの旅から生まれた映画作品群および写真集を分析した論文、および静止画像と動画像を自在に往復する彼の方法論をめぐる論文を公表した。
③ その他として、トリュフォーの全作品を対象に、頻出する「写真」のモチーフを映画・フェティシズム・死の 3 点からとらえた論文、佐藤真のドキュメンタリー作品における写真の力を論じた論文、ドイツの実験的な映像作家ハルーン・ファロッキの『猶予期間』を分析した発表、ロベール・ブレッソン『白夜』の作品解説などを公刊した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 堀潤之、『白夜』解説」、査読無し、ロベール・ブレッソン『白夜』Blu-ray DISC 封入リーフレット、エタンチェ、2016 年、2-17 頁

② 堀潤之、「ウェルズ、ゴダール、偽なるものの力能」、査読無し、『中央評論』293 号（特集「映画とフィクション」）、2015 年、62-80 頁
③ 堀潤之、「ゴダールのデジタル革命と動物のまなざし――『さらば、愛の言葉よ』の３D映像をめぐって」、査読無し、『ユリイカ』2015 年 1 月号、141-149 頁
④ 堀潤之、「ジガ・ヴェルトフ集団の冒険」、査読無し、『ジャン＝リュック・ゴダール＋ジガ・ヴェルトフ集団ボックス　deux』（Blu-ray/DVD）封入リーフレット、2015 年、6-17 頁
⑤ 堀潤之、「『さらば、愛の言葉よ』解説」、査読無し、『さらば、愛の言葉よ』Blu-ray／DVD ディスク封入リーフレット、2015 年、頁番号記載なし
⑥ 堀潤之、「ベルールの反時代的考察――「35 年後――「見出せないテクスト」再考」の余白に」、査読無し、『表象 08』、表象文化論学会、2014 年、94-99 頁
⑦ 堀潤之、「クリス・マルケルの日本への旅」、査読無し、東志保・港千尋・小野聖子編『未来の記憶のために　クリス・マルケルの旅と闘い』、山形国際ドキュメンタリー映画祭、2013 年、58-61 頁
⑧ 堀潤之、「映画は音楽のように――日本におけるジャン＝リュック・ゴダール作品の受容についてのささやかな覚書」、査読無し、『東西学術研究所紀要』第 45 輯、2012 年、163-177 頁

〔学会発表〕（計９件）

① 堀潤之、「存在論的リアリズムの起源へ――アンドレ・バザン「写真映像の存在論」再読」、科研費ワークショップ「リアリズムあるいは映画の夢と目醒め」、2016 年 12 月 3 日、東京大学（東京都）
② 堀潤之、「イントロダクション――バザンの著作群の出版状況小史」、「バザンのウェルズ論――リアリズム再考」、ワークショップ「アンドレ・バザンの現在」、表象文化論学会第 10 回研究発表集会、2015 年 11 月 7 日、東京大学（東京都）
③ 堀潤之、「映画と他の諸メディウム――テレビ、ヴィデオ、コンピュータ」、シンポジウム「映画批評・理論の現在を問う――映画・映像のポストメディウム状況について」、日本映像学会第 41 回全国大会、2015 年 5 月 30 日、京都造形芸術大学（京都府）
④ 堀潤之、「ゴダールとマルセル・オフュルス――戦争の記憶と映像の世紀」、2015 年 2 月 22 日、神戸映画資料館（兵庫県）
⑤ 堀潤之、「歴史家ゴダール――『ゴダール・ソシアリスム』再考」（講演）、日本映像学会中部支部 2013 年度第 2 回研究会、2013 年 12 月 14 日、名古屋文化短期大学（愛知県）
⑥ 堀潤之、「ハルーン・ファロッキ、あるいは映像の「読解」――『猶予期間』(Aufschub / Respite, 2007)を見る」、神戸映画資料館レクチャー：映画の内／外　第 10 回、2012 年 9 月 23 日、神戸映画資料館（兵庫県）

〔図書〕（計８件）

① アンドレ・バザン『オーソン・ウェルズ』、堀潤之訳、インスクリプト、2015 年（総ページ数 192 頁）
② 堀潤之「ゴダールの「ユダヤ人問題」――歴史のモンタージュとの関わりを中心に――」、加藤幹郎監修・杉野健太郎編『映画とイデオロギー』所収、ミネルヴァ書房、2015 年、247-275 頁
③ 堀潤之「クリス・マルケル、あるいは運動と静止の戯れ」、金子遊・東志保編『クリス・マルケル　遊動と闘争のシネアスト』所収、森話社、2014 年、27-49 頁
④ 堀潤之・菅原慶乃編『越境の映画史』、関西大学出版部、2014 年（総ページ数 274 頁）
⑤ Junji HORI, “Godard, Spielberg, the Muselmann, and the Concentration Camps”, in Christina Stojanova and Douglas Morrey (eds), *The Legacies of Jean-Luc Godard*, Waterloo, Ont.: Wilfrid Laurier University Press, 2014, pp.67-79
⑥ レフ・マノヴィッチ『ニューメディアの言語』、堀潤之訳、みすず書房、2013 年（総頁数 468 頁）
⑦ Junji HORI, “Truffaut and the Photographic: Cinema, Fetishism, Death”, in Dudley Andrew and Anne Gillain (eds), *A Companion to François Truffaut*, Wiley-Blackwell, 2013, pp.137-152
⑧ Junji HORI, “La puissance de la photographie : À propos de deux films de Makoto Sato”, in Claudia d'Alonzo, Ken Slock, Philippe Dubois (dir.), *Cinéma, critique des images*, Udine: Campanotto, 2012, pp.185-192

〔その他〕
ホームページ等
http://d.hatena.ne.jp/tricheur

６．研究組織
(1)研究代表者
堀　潤之　　（Hori, Junji）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：80388412